

リニューアルされた 大阪市立美術館

大阪市立美術館
館長

内藤 栄



今、美術館・博物館業界はリニューアル続きである。高度成長期に各都道府県や市町村は競うように博物館と美術館を建て、また多くの企業が美術館などの文化施設を持った。その多くが今、老朽化の嵐にさらされている。昭和11（1936）年に開館した大阪市立美術館もご多分に漏れず、展示ケースは老朽化し、収蔵庫の収容率は限界を超えていた。おしゃれなカフェやショップもなく、館内は全体に薄暗く、くたびれた感じだった。学芸員が自嘲気味に「コレクションを他の館で展示すると美しく見える」と話すのを耳にしたことがあったが、これは私も感じていた。くたびれた展示ケースでは作品の良さを引き出せない。そんなこともあり、大阪市では当館を他の施設と統合する計画を検討したが、当館の建物は廃館にするには惜しい名建築であった。やがて、歴史ある建築をよみがえらせることで、大阪市の魅力創造に寄与しようという機運が高まってきた。当館のリニューアルが決定された。

リニューアルの方針は、①ひらかれたミュージアム、②歴史的建造物の価値の向上、③最新技術による展示・収蔵環境の向上の3つであった。①は美術館に気軽に入っていただくのがねらいである。中央ホールを無料ゾーンとしたほか、館の後ろにある慶沢園（旧住友家庭園）側にも抜けられるようにした。なお、無料ゾーンに念願のカフェとショップ、そして慶沢園を臨むテラスも新設した。②では昭和11年の開館当初の姿に可能な限り戻そうと考えた。当館は昭和50年代に空調や照明の配線工事が行われ、それを隠すため天井が新たに張られた。天井は窓をふさぎ、それが館内を陰気なものにしていた。リニューアルによって当初の天井高に戻った部屋の気持ちよさは期待以上であった。中でも劇的に変化したのがカフェになった旧美術ホールである。この部屋は天井をはがすことで出窓式の背の高い窓が姿を現わした。連日待ち列ができる人気店となっている。

そして、リニューアルで私がつとも力を入れたのが③の展示・収蔵である。美術館の一番大事な使命は、展示物の魅力を観覧者に余すところなく伝えることにある。皆さんは、展示ケースにご自身の影が映るなどして、作品が見にくいと感じたことはないだろうか。これが観覧者と展示物との間に

埋めがたい距離を作っている。これを防ぐにはガラスの存在を感じさせない展示ケースを作る必要がある。また、掛軸が遠くて細部が見えないと思ったことはないだろうか。これは掛軸を懸ける壁をガラスに近づけることができれば解決する。リニューアルでは施工会社や照明デザイナーが見事に私の要求に応えてくれ、現時点で日本一展示品を美しく見せる展示ケースを導入できたと自負している。ぜひご覧いただきたい。

リニューアルによって年間の開館日数は5割増の300日ほどとなる。これまで特別展に隠れがちだったコレクション展示も常時開催する予定である。コレクションこそ美術館の「個性」であり「命」である。ぜひコレクションをゆつくり楽しんでほしい。また、展覧会だけでなく、イベントやパーティーなどさまざまな用途で当美術館を利用していただきたい。気軽に立ち寄る、暮らしの隣にある美術館であり続けたいと考えている。

内藤 栄(ないとう さかえ)

1960年埼玉県生まれ。筑波大学大学院博士課程芸術学研究科退学。博士（芸術学）。サントリー美術館に8年間勤務し、1996年より奈良国立博物館に勤務。専門は仏教工芸史で、特に舍利信仰の美術と正倉院宝物に関心をもって研究を行っている。2022年より大阪市立美術館館長。著書に『舍利荘嚴美術の研究』（2010年 青史出版）、『日本の美術539号 舍利と宝珠』（2011年 ぎょうせい）がある。